

子	ど	も	目	線	・	大	人	目	線											
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	②	8				
													大	谷	多	加	志			

■ 子ども目線で…？

『子どもの目線で考えましょう』。子どもの支援に関わる人であれば、書籍や研修会の中で一度とは言わず何度も聞いたことがある言葉かもしれません。ですが、実際に子ども目線に立つのはなかなか難しいことです。また、子ども目線になっているつもりでも、「子ども目線のつもりの大人目線」になっていることも少なくないように思います。このことを考えるきっかけになったのは、作業療法士である太田篤志先生の講演を聞いたことです。

太田先生は、作業療法士であり、子どもの発達支援やおもちゃの販売をしている(株)アニメーションプレイジムの代表でもあります。そして講演の中で、おもちゃを購入する際の客の視点に2つの種類があるというお話がありました。一つは「これは〇〇くんとかが好きそうだなあ」と子どもの姿を想像しながら検討する視点。もう一つは、「これにはどんな効力があるんですか？」とおもちゃの利点や効果から購入を検討するという視点です。先生は後者の視点でおもちゃ選びをする方が、あまり得意ではないそうです。

どちらも、一見すると子どものことを考えた発想であるように思えます。「〇君がすきそう」というのは、子どもの好みを把握

し、子どもが楽しめそうか(どんな活動ができるか)という観点から検討しています。また「どんな効力があるか？」(つまり、このおもちゃで遊んだ結果としてどのような力が身につくか)というのも、子どもの発達促進に有効かどうかという観点から検討しており、これも子どものことを考えていると言えます。ただ、違いもあります。前者は、子どもが楽しめるかどうかに関心が当たっており、それがどういうメリットがあるのかという点についてはひとまず後回しです。一方の後者は、子どもが好きかどうかはともかく、どういうメリットがあるかを優先して検討しています。

この「メリット」という観点が、「子ども目線」を考える上では曲者です。少なくとも、「遊び」において、子どもはメリットを考えて遊んでいるわけではないからです。子どもが絵を描くときには、「絵が上手になりたい！」と思って描いていることはほとんどないでしょう。むしろ、「描きたいものを描く」ことを繰り返した結果として、手指の操作や絵を描く技術が向上するのです。この場合の「メリット」、つまり絵が上手になるように…というのは、よく考えると大人の願いです。ここではこれをあえて、「子ども目線のつもりの大人目線」と呼ぼうと

思います(表1)。もちろん、子どものことを考えずに大人の意見だけを優先しているという意味ではありませんが、あくまで発想や思考の一步目が、大人の願いから出発していることを強調するために、このような言い方をしていると考えて下さい。

表1 おもちゃについての質問と子ども目線・大人目線

質問	おもちゃ選びの視点	目線
〇〇くん好きかな	子どもからどう見えるか、理解されるかという、子どもを主体とした目線	子ども目線
どんな効力があるのか	どういうメリットがあるか、どのような機能があるかという客観的目線	子ども目線のつもりの「大人目線」

もちろん、子ども自身が上手になることを望んでいないということではありませんし、「じゃあ、子どもにはしたいことだけさせて、大人が必要と思う力を身につけさせなくてもいいと言うのか」という反論も出てきそうです。しかしながら、この連載でも繰り返し述べてきたように、子どもの成長・発達は、「結果的なもの」です。例えば、言葉についても、「言葉を話せるようになりたい!」と思っていたから話せるようになるわけではなく、もともとは別の動機(コミュニケーション欲求)があり、そのための道具立て(スキル)として言語が結果的に獲得されるわけです。

そして、「やりたいことだけでよいのか?」というお決まりの指摘は、一理くらいはあるのかもしれませんが、これに縛られないといけないほどの深みもありません。なぜなら、モチベーションがないのに、無理やり形だけやらせたとしても、それは非常に効率が悪く、定着もしづらいということを、私たちは数多くの経験から思い知っているはずだからです(例えば、英語教育のコストと成果は、どうでしょうか?)。

■ 発達検査の中の子ども目線・大人目線

このおもちゃ選びの視点についての話を聞いた時に、私はとても共感を覚えました。そして、発達検査について、いつもある質問に対して感じていた違和感の正体が解けたと思いました。

それは、この連載でも何度も取り上げている「この検査項目は、子どものどういう力を見ているのですか?」という質問です。この質問は、「子どものもつ力を正確に理解し、適切に支援したい」という思いから発せられているように思います。そういう意味では子どもを思っている質問なのです。しかしながら、「どのような力か」というのは、子どもの行動を大人の理解の枠組みで捉えようとする「大人目線」であると思われます。

「〇〇の項目ができる子どもは〇〇の能力を持っている」という捉え方に変換した途端、とても多くのものが削ぎ落とされ、本当の意味での「子ども理解」にはつながらないのではないかと思います。また、「〇〇の項目ができる子どもは〇〇の能力を持っている」という理解の仕方が適切であるケースもあるとは思いますが、当然当てはまら

ないケースもあります。ただ、この解釈を書籍や人から聞いた知識で行っている場合、必ずしも検査者が自発的にこの解釈の適切さについて判断し、修正することができないということも、検査の利用という点では問題があると思います。

一方で、時々検査をしながら、「この子は〇〇の課題が好きかも」とか、「〇〇の項目にこんな反応をしそう」という想像が頭に浮かぶことがあります。これは、おもちゃ選定の視点の「このおもちゃ好きかな?」という発想と近いと思います。もちろん「こんな反応をしそう」という想像の中には子ども

の理解や能力の評価も含まれているとは思いますが、それらも込みにして、「その子どもの目にはこの課題状況がどのように映り、どのように感じたり、理解したりし、結果的にどのように反応しそうか」を想像することは、やはり子どもの主観的世界に迫ろうとする取り組みであると思えます。そして、この想像は、かなりの確率で裏切られます。つまり、実際には子どもの反応が予想と違う場合が少なくないということです。これは、検査者の「子ども理解」を修正する大きな手掛かりになります。

表2 発達検査における視点と子ども目線・大人目線

発想	発達評価の視点	目線	解釈の修正
〇〇くん好きかな	子どもからどう見えるか、理解されるかという、子どもを主体とした目線	子ども目線	されやすい
どんな力をみているのか	どういう力があるか、どのような機能があるかという客観的目線	子ども目線のつもりの「大人目線」	されにくい

仮説を持ちながらも、目の前で起こることに適切に注意を向け、適宜考えを修正していく。このような「予想」と「修正」の作業を重ねながら子どもの発達像を理解して

いくことが、本当の意味での「子ども理解」と、それに基づく「発達支援」につながっていくのではないかと考えています。